上田西高校生徒会 被災地へ

石川県七尾市でボランティア活動　現地の高校生徒会と交流も

西週

第１１０号
発行
２０２４年
４月５日（金）
上田西高校
新聞委員会
編集局

編集局長：田村さくら
新聞委員長：金井　茉優
大田すみれ
写真提供：生徒会
鵬学園高等学校

3月25日26日に上田西高校生徒会が石川県七尾市を訪れ、令和6年能登半島地震の災害ボランティアに参加した。初日は繋がりがあった七尾市の鵬学園高等学校を訪れ、被害の様子や学校生活、日常生活等について話を聞き、意見交換を行った。また、実際に現在も校内の至る所に残る震災の爪痕も見てまわった。26日には3グループに分かれ、各グループごと七尾市内でボランティア活動を行った。編集局員2名も参加した、2日間に渡る被災地訪問の様子について取材し記事にまとめた。

（大田すみれ）

地震の影響で鳥居と灯篭が崩壊した松尾天神社は鵬学園高等学校のすぐ近所にあった＝３月２５日石川県七尾市

鵬学園高等学校に入る上田西高校の生徒会役員

ボランティアを行う上田西高校の生徒会役員と生徒会顧問の先生＝３月２６日

ボランティア

震災ゴミの搬出作業をサポート

不自由感じつつ思い出の場所で暮らす人も

大雨が降りしきるなか七尾市のボランティアセンターへ向かい、訪問宅の決定、ボランティア内容についての説明を受けた。ボランティアセンターから車で40分ほどの場所にあった被災した家屋へ赴き、家具や窓ガラスの片付けを行った。

84歳で一人暮らしをしている山崎たまえさんは「家の周りに誰もいないため棚やガラスも全て一人で運び出すのが大変だった」、「ボランティアの皆さんが来てくれることが助かる」と話した。山崎さんは、震災により家が不自由になってしまった今でも「思い出の場所」の自宅で暮らしている。

訪問した住宅では、食器やガラス一枚一枚も割れていて、襖や障子なども全て使いものにはならなくなってしまった状況を目の当たりにし、被害の大きさを肌で感じた。雨が降っていた中での作業には限界があったが、最大限のことを出来た活動になった。ボランティアに参加した生徒会役員からは「行ってわかることが多かった。もっと人の役に立ちたいと感じた」という感想が聞かれた。（大田すみれ）

震災ゴミの搬出作業の様子

学校交流

鵬学園高等学校にも大きな被害が

サッカー部は活動拠点を富山に

七尾市にある鵬学園高等学校生徒会と交流会を行った。被害状況から学校に来ることが困難な中４人の生徒が参加してくれた。自己紹介から始まった交流会は、学校の被害状況の報告、上田西高校生徒会役員からの質問、フリートークと続いた。交流会後には実際に学校周辺の被害にあった場所を案内してくれた。崩れた壁や物が倒れている状態を目の当たりにして地震の大きさを全員が実感したはずだ。グラウンドは地割れし、使用できなくなっていた。

鵬学園生徒会との意見交換

その影響で、石川県の強豪校としても知られるサッカー部は練習ができなくなり、富山県に活動拠点を移した。サッカー部主将で長野県塩尻市出身である竹内孝誠さんは、富山県で過ごした2ヶ月間について、「いつも通りの生活ではないがたくさんの方の支援や協力のおかげで充実した2ヶ月間を過ごすことができた」と話した。現在は石川県に戻り、4月から新しい寮で生活を始めている。まだまだ困難なことは多いが少しずつ元の生活に近づこうと進んでいる様子であった。

（金井　茉優）

令和6年能登半島地震

令和6年能登半島地震は年明け早々1月1日に16時10分に石川県能登半島の地下で発生した内陸地殻内地震。マグニチュードは7.6で、内陸部で発生した地震としては日本でも稀な大きさの地震であった。

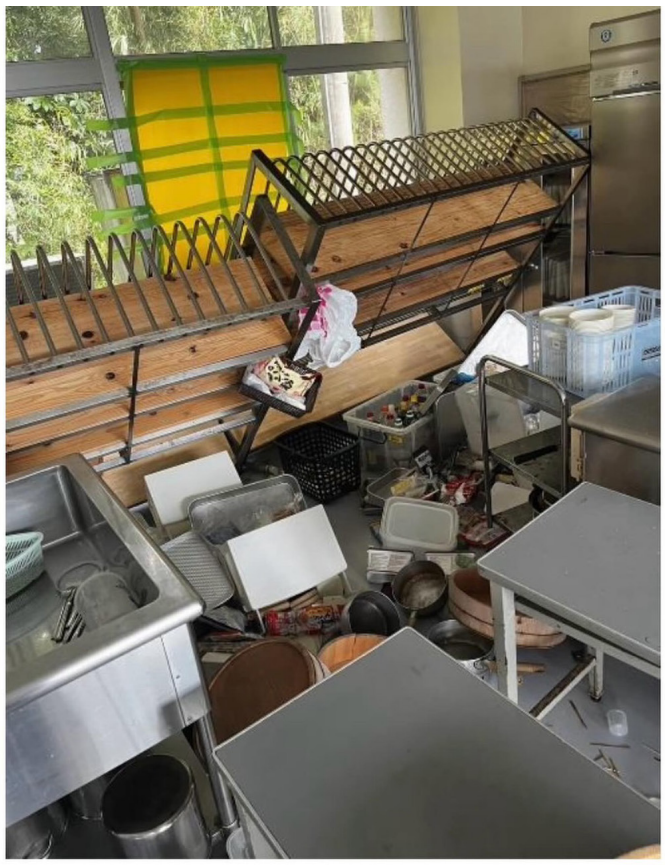
この地震により日本海沿岸部では広範囲で津波が観測され、土砂災害、火災、液状化現象なども発生した。

復興に向けてボランティア受け入れ等も開始されてはいるが、いまだに震災の爪痕は各地に残っている。

令和６年能登半島地震の爪痕

被災地の被害の状況は思った以上に大規模だった。私たちが住む長野県での揺れから震源地はさらに大きな揺れであったことは予想できるだろうが、被害の大きさは想像を上回る。道路の地割れや崩れた壁、地面の大きな段差など少し道を歩くだけで数々の被害が確認された。家が大きく崩れた様子を見て、毎日過ごしていた場所が変わり果てた方々のつらい思いが痛いほど感じられた。また、七尾市の鵬学園高等学校も大きな被害を受けており、通常の学校生活を送れない日々が続いていた。現状、復興は進んでいるように見えるが元の生活には程遠い。当たり前の日常生活を送ることができていることは普通ではない。（金井　茉優）

生徒用ロッカー（鵬学園高等学校）



調味棚倒壊（鵬学園高等学校）

階段　破損　（鵬学園高等学校）

グラウンド隆起・亀裂（鵬学園高等学校）

地震で隆起した道路　震災から４ヶ月ほど経過するが七尾市内にはまだ爪痕が残る

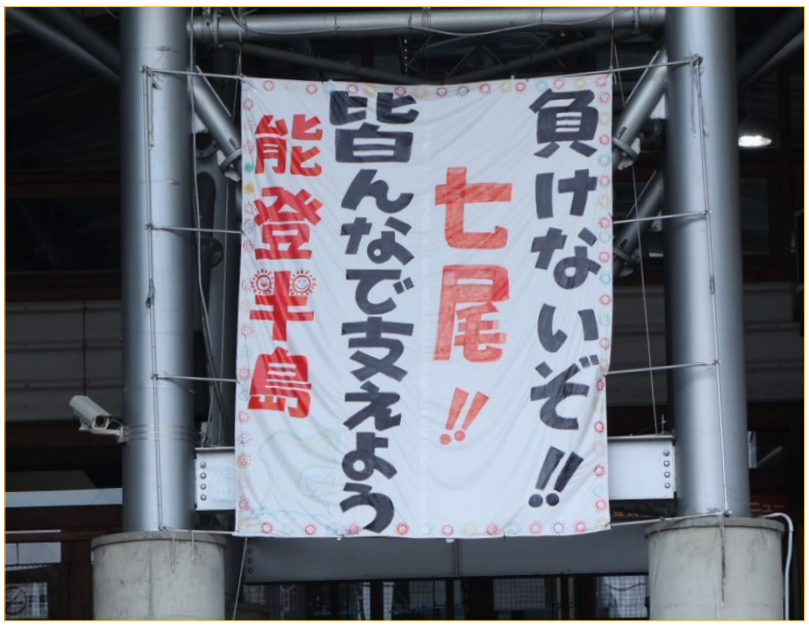
ーコラムー 現状を知りできることからはじめよう

今回、実際に被災地に行ったことで、想像よりも大きな被害にたくさんの方が苦しんでいることを肌で感じた。現地に行くことは簡単にできることではないし、受け入れ体制が整っていない状況での現地入りはかえって被災地の負担となる。ボランティアの受け入れ体制が整備されたことで今回の被災地訪問が実現し、生の声を聞けたことで今必要なものや困っていることを知ることができた。

私たち生徒会役員が行ったボランティアは微力ではあるが、人の力になれたことには間違いないと自負している。今回のボランティアでもっと多くの人の力になりたいと自分自身が思うことができたが、現地に行かなくとも高校生にもできる支援はたくさんある。

その一つとして上田西高校生徒会は募金活動から始めた。その募金活動では多くの生徒の想いからたくさんの支援金が集まった。被災者の方々を助けたい、力になりたいと思い支援をする人が増えることが復興への大きな一歩だと思う。

（金井　茉優）



道の駅能登食祭市場に掲げられていた横断幕